



〔鼎談〕

大学の大衆化と学生気質

出席者

駒井 四郎 (大阪女子学園理事長)

山本文雄 (同志社女子大学総務部長)

河合 璋 (同志社大学就職部長)

戦前・戦時下の同志社大学

駒井 歳の順ということで、先ずわたしが口火をきらせていただきます。

わが国の学生気質の移り変りについて、かつて東京教育大学の教授であった唐沢富太郎さんの著『学生の歴史』に書かれています。日本における近代的な教育制度が発足したのは明治五年、学制発布からです。それはフランスの教育制度をとりいれたもので、日本を八つの大学区に分け（後に七つにしました）、それぞれの大学区に一大学と中学校、小学校などを配置するという画期的なものでした。しかし当時のフランスの文教政策に似て、非常に中央集権的な性格が強いものでした。当時の日本は後進国でしたから、先進国に追いつかねばならないという発想からでたのです。その当時いわれましたことは「和魂洋才」で、技術や知識は西洋のものを採り入れるが、精神は日本の伝統的なものを失わないようにしたいという考え方でした。そうした大学で育成される学生は、政治・経済・文化方面におけるリーダー、すなわちエリ-

トだったのです。帝国大学の学生は特権階級でありエリートであった。

それに対して、徳川時代の末期から各地につくられた私塾があり、さらに明治以降、外国の私的自由教育の流れを汲む私学（同志社もその一つです）が創られる。帝大と、私学はもとと違うわけです、その目的とか性格がね。だから歴史的にみた場合、大学あるいは大学生といいますが、一緒に論じられないところがあるわけです。

山本 わたしたちは三人とも、私学の同志社出身ですが、駒井先生が同志社へ入学されたのは何年ですか。

駒井 昭和三年に神学科へ入りました。その頃の神学生は年齢もまちまちで、ちょっと変った雰囲気がありました。一般の学生は制服制帽姿でした。同志社が制定したではありませんでしたが、同志社タイプの制服制帽を商売人がつくりましてね。

山本 海老名弾正総長の辞任をめぐって、騒動があったでしょう、あの頃ですね。

駒井 わたしが入学した直後に、岩倉の校地問題について学園騒動がありました。チャペルで中村遙さんらがアジ演説をやっている

のを、わたしらは聴いたりしましたけどね。当時の神学生は理事会攻撃などもよくやりましたよ。

山本 神学生が学校行政の批判をやったり、学内のリーダー・シップをとっていた。そういう体質は戦後の同志社にもありましたね。

駒井 宗教というものには、そういう要素があるわけですよ。コンサーヴァティヴな面もありますが、非常に革新的なこともやる。

山本 それが同志社のキリスト教じゃないですか、社会的キリスト教とよく言われた。福音主義的なものをもちながら現実的社会的な問題をも強く信仰のなかに反映していくわけですね。現在の大学の宗教部も、同和問題とかもろもろの社会的な問題をとり上げてやっているでしょう。

わたしが入学したのは昭和十五年で、予科から神学科に入ったのです。もう戦時色の濃い時代でしたね、そういう時代のせいでもあるでしょうが、当時の大学生は国家の權威とか、先生の權威などに対して非常に服従的でした。

駒井 わたしらの頃には、新島先生がいわ

れた自由主義、キリスト教主義の雰囲気、まだ多分にありましたからね。

山本 生徒監や先生に対して、子供っぽい反抗、たとえば「休講にせよ」と言ったり総サボをやったりね。そういうことはありました。が、先生が言われることには間違いはないと、全体的に学生は思っていましたよ。先生も自信をもっておられるように見えたり、威張っていました。自信過剰気味の先生もおられた。（笑）

駒井 わたしらの時代から軍事教練が始まったのです。といっても鉄砲をかついで走られるというようなものではなく、教室の中で軍事作戦を教えられるのです。最初の軍事教官は大佐で、名前は忘れましたが軍人にしては知的な人でしたが、わたしは一回出席しただけで、あほらしいからそれきり出なかった。それで召集されてから、大学の教練の成績が零点だったので、幹部候補生になれなかった。

河合 だから軍曹とまりやった。（笑）

山本 わたしらの時代はそんな生易しいものじゃなかった。ところが京都大学では、軍事教練に反対して学生が教官をなぐって問題



駒井 四郎氏

になったり、軍に対する批判精神があったように思いましたが、私の予科の時代は同志社にそういう学生はいませんでしたね。同志社精神がもし生きていたとしたら、一人や二人教練に反対する学生が出ていいはずですがね。

わたしの同級生に久米君という此春寮の寮生がいて、わたしが軍隊へ行行って留守のときでしたが、中立売署へ連れて行かれてひどい拷問をうけています。彼の場合は教練反対とか反戦といったものではなく、福音主義的な信仰を捨てなかったから、国体に反するということでやられたように思うのです。人道主義的な立場からレジスタンスをするような学生はいなかったし、先生の中にも見つけられませんでした。

河合 わたしは昭和十六年に予科へ入りまして、学部は復員後に出ました。入学した年に太平洋戦争勃発ですから、学校の中でもいろいろ禁止事項があって厳しかったですよ。予科生はたばこを吸ってはいかんとかねえ。予科長は木畑浩二郎先生、大学長は黒川芳蔵先生でしたが、ゲートルを巻いて戦闘帽をかぶって、勇しい姿でした。

そういう時代でしたが、厳しい規制の中で最大限にやんちゃをやりましたな。予科の生活はけっこう楽しかったですよ。個性を持った先生がおられたし、学生にも個性豊かなのがいました。厳しいなりにそこに自由な雰囲気があったよっていましたよ。

駒井 先生方との人間的な接触というものがありましたね、とくに神学科など学生も少なかったから。

河合 それはありました。

山本 わたしなども学生生活の楽しい思い出はあるわけです。しかし、わたしたちが接した神学科の先生方はみな、長年アメリカなどへ留学されて、それぞれ歴史観なり世界観あるいは哲学をお持ちだったと思うのです。あの時代に、人間とはどういうものか、

戦争とはどういうものかといった本質的な問題を教えてくださった先生はおられません。あの時代にも日本のキリスト者の中にクエーカー教徒のような、戦争を否定した人たちがいたわけでしょう。

駒井 わたしたちの頃と時代がちがっていきますからね、わたしたちの時代には、神学科の学生は軍事教練をボイコットしていた。

河合 わたしらの頃は、もちろん軍事教練はありましたが、愉快的教官でねえ、みんなけっこう楽しくやっていましたよ。やはり時代のちがいでしょうな。

山本 神学科の教科にも国策を反映して、日本精神史というような科目もありました。そういう状況ではあったけれども、いまふり返ってみて、人間の尊さとか、戦争の罪悪性とか、そういった問題を、多少は語って欲しかったと思うのです。語りたい先生はおられたかもしれないが、語りたくても語れない時代だったんでしょね。

戦後の学生厚生補導

駒井 わたしは昭和二十七年に学生部の職



山本 文雄氏

員として同志社へ帰ってきたのです。そのころ学生部には、大江直吉、山本文雄、日並幹男といった方々がおられました。

山本 わたしは昭和二十二年に同志社へ就職して、神学部の研究室に二年ほどいました。それから、二十四年に学生部へ移りまして、二十七年の夏にアメリカへ留学したのです。

駒井 昭和二十七年というのは、いろんな意味でわが国の転換期だったのです。占領が解かれて日本が国際連盟へ復帰した年であり、戦後の虚脱状態からようやく立ち直り、独立国家としてやっていくという構えが出来てきた年ですからね。しかし、経済的にはまだまだ不安定で、米よこせデモや血のメーデーなどが起こっている。

山本 荒神橋事件がその翌年ですね、あれは学生運動としては当時相当大きな事件だった。わたしはアメリカにいて手紙で知らされたのです。

駒井 学校教育制度も、教育の民主化と教育の機会均等を目的とした六・三・三・四制がようやく定着してきたころでした。統計の上でみますと、終戦直後の昭和二十三年ごろの大学生数は、国・公・私立を合せて僅か一万二千人ぐらいいですね。それが二十七年ごろには二十万人台になっている。つまりその時点において、大学はエリートの大学から大衆の大学の方向へ移行しているわけです。このように大衆化された大学において、学生をいかに落ちこぼれないようにするかということ、チューデント・パーソナル・サービスという厚生補導の理念が、大学へ入ってきたわけですね。

山本 アメリカの占領政策の一環として、日本の教育をどうするかということで、使節団がやってきまして、学校教育制度も改革されたわけですが、新しい大学では学生の厚生補導をいかに民主的に効果的に行うか、その理念も方法も日本にはなかったですからね、

アメリカの教育使節団から示されたS・P・S (Student Personnel Service) にわれわれは飛びついたわけですよ、これしかないということでした。ね、昭和二十五年ころから始まったのです。

駒井 そうでした。国・公・私立が一緒にあって研修会や研究会をやりまして、わたしも行きましたよ。そういうことから、学生部はこの路線に沿って活動しなければならなかったという目標ができてきましたね。

当時はまだまだ経済的には貧困でしたから、学生部の仕事の中ではアルバイトの世話が大きなウエイトを占めておりました。政府は日雇労働者つまり失業者対策に追われていましたが、現実の問題として職業安定所の前は長蛇の列でした。そういう人たちの救済が優先されましたから、学生の仕事はなかなか得られなかったわけですね。特に経済的に貧困な学生に対しては、奨学金を与えるということもやりましたが、国の奨学金、同志社にもいろいろ奨学金はあったけれども、それらは僅かなものでした。だからアルバイトの世話をしなければならなかったのです。その当時の文部省の統計をみましても、学生の半数



河合 璋氏

以上が貧困で、そういう学生を救済するために国が学徒援護会をつくったわけです。

河合 学徒援護会が出来たのは、割合い早かったですよ。

駒井 そうですね、わたくしが同志社へ来たときには、もうありました。

河合 確かに、学生生活というものは大変なものでした。それで奨学金の問題、下宿やアルバイトの問題、それらさまざまな問題をなんとかしなければならぬ。その一つとして生まれたのが京滋地区アルバイト対策協議会ですね。

山本 それはもう少し後でしょう。

河合 後でしたけれども、非常にハンギリな時代で、厚生課など一生懸命でしたよ。たとえば奨学金の枠をとるためにいろいろ働

きかけるとかね、アルバイトの料金を協定によって決めさせるとか、下宿提供者を求め、下宿料金を協定で決めるとか……。今はアルバイトといってもそのころとは随分ちがうんじゃないですか、生活費を稼がねばならない学生は少ないでしょう。下宿事情にしても当時と今では雲泥の差ですよ。

学生相談室の開設

駒井 カウンセリングが始まったのも、わたくしが同志社へ来てからです。東京大学ではじめてカウンセリングの三ヶ月もの研修会がありました、国・公・私立合同でやりました。カウンセリングの専門家のロビンスやポードンなどが来て……。カウンセリングというのは就学上の問題もありますけれども、情緒不安定とか精神異状の問題を対象としていました。大学が大衆化しますとその社会に適応できない学生が相当出てくるわけですね、学生の自殺が統計的に随分高まってくるのか。それで同志社でもやろうじゃないかということでした。

河合 大下角一大学長時代ですよ、ボラン

ティアのかたちで心理学や社会学専攻の先生方に教えるを乞いながらスタートしました。社会学学科のデッソウ先生の特訓を受けるとか……。

駒井 現学長の松山義則先生も参画されましたね。

河合 遠藤汪吉先生、伊藤規矩治先生、住谷馨先生、大塚達雄先生、浜治世先生などにも参画をお願いしました。学生部の職員は勉強をしなければならぬということで、あのころは実によく勉強しましたなア。

学生が何千人同志社にいうと、その一人一人はかけがえのない人格なんだから、そういう個人個人を大事に考え、それぞれの個性に即した生き方を各自が見出してゆく、それを大学は援助するんだと、わたしなどはS・P・Sの理念を受け止めていました。ですから、教室における授業だけでなく、クラブ活動その他幅広く学生生活の全般にわたって心を配らなくちゃいけない、そうしてそれぞれが人格の完成をめざして大学生生活を送ってもらわねばならぬと、そういう話でしたね。学生助育とも申しましたが……。

学生部活動の転換

駒井 カウンセリング・センターの開設と

ほぼおなじころから「フレッシュマン・ハンドブック」を発行して新入生に配布するとか、オリエンテーションにも力を注ぐようになります。手前みそのようになりますが、同志社の学生部は非常に進んでおった、他大学でやらないことを先進的にどんどんやりましたよ。

戦前・戦中の学生監すなわち学生部というのは、警察的な要素がつよかった、学生生徒の取締りとか監視とかでね、全部が全部そうじゃなかっただろうけれども。われわれはあれではいかん、民主主義社会の一員となり、そうした将来の民主主義社会を担うような人物を、大学はいかにして育てるか、そういう問題意識を持っていましたよ。それで教室での授業だけが教育ではない、課外も立派な教育の場なんで、大学は幅広い教育をしなければならんということを学びました。そうした理論的な基礎を学ぶことによって、アカデミックな学問的指導と課外における指導という

二本の柱が必要なんだ、それがスチューデント・パーソネル・サービスの中心だという認識をもったものです。それまでの日本の大学にはなかった教育理念でした。

山本 当時は学生部の研究会で熱心に討論をしました、シリーズでパンフレットなどを出しましたね、駒井先生の「大学の自治」は、今や古典になりましたが。(笑)

駒井 学生部の仕事をやっておりますと、「大学とは何か」ということについて学生と討論しなければならんことがある、それで勉強をしなければならんと思つて始めたのが、大学論ということになったわけです。

山本 ボローニャ大学を知つたのは、駒井先生の影響ですよ。(笑)

河合 よう聞かれましたなア。しかしそういう勉強をやりながら、「学生部報」とか「学生部年報」を編集して学内外へ配りましたね。学生部の仕事をP・Rしたわけですが、「年報」のようなものを編集するのは大変な仕事でした。メモ魔といわれるぐらい記録しておいて、それを一年の終りにまとめるということをする、あれもいい勉強になりましたなア。

山本 確かにあの「学生部年報」は過去の記録がちゃんと残っていていい仕事ですね、学生たちの歴史がちゃんとわかるんだから。

いまの学生部の人が、ああいうものを利用して学生部の年譜をつくってくれるといろんな意味で役に立つので、わたしは是非つくってほしいと注文しているのです。

河合 学生部がそんなことに金を使うものだから、当時のある部長さんから文句がでたりしましたなア。

駒井 ビューロクラシー発想法というのは、そういうふうを考えやすい。学生部は学生にアドバイスする場合に、そういう発想法はなぜいのかという、その理論を持つとうじゃないかということで、研究会をやったわけですからね。

山本 とにかく、先ほどから言われているように、S・P・Sの理念というのは、新制大学の教育理念と軌を一にしていた、あるいはそこから出たのです。新制大学における教育は全人的教育を目指すねばならぬ、特定の専門家よりもむしろ民主的な健全な市民を育てなければならぬ、というところに目的を置いたわけでしょう。そうすると、人間には理

性的な面と情緒的な面と両面あるわけで、だから教室の講義と同時に、人格の円満な発達を願うには課外活動を重視する必要があるというわけですね。その課外活動を含めて、教室外での学生の活動や生活に対して、教育的な観点からできるだけのサービスをおこなう、それが学生部の任務だと考えていいと思います。学生部も大学教育の一翼を担っているんだということで、当時の学生部のスタッフは理想に燃えておったわけですよ。

河合 ほんとうにそうでした、一にも勉強、二にも勉強でしたな。

山本 ところが、大学の目的も教育理念も変ったはずなのに、旧制時代からの教室中心的な考え方がまだ根強く残っていて、「学生部はいらんことをするな、大学というところは教室で学問を教えるところなんだ」という批判が、陰に陽にありました。そして、昭和三十五年あたりから高度経済成長が叫ばれるようになってまいりますと、「社会に出て直接役に立つ学問を教えねばならん」ということで、だんだん専門教育が重視されるようになってきたわけですね。そこへ学生運動が加わってきて、大学は学生部に学内の秩序維

持、わるく言えば防波堤のような役割を期待するようになってきました。それから四十年以降の大学紛争になる……。

学生運動について

駒井 転換期は、だから昭和三十五年ですね。ちょうど六十年安保の年であり、岸信介首相が辞任して池田勇人内閣が発足する。その年の経済白書を見ますと、機械工業の生産が前年度に比べて六十五%伸びているのです。そうした発展を背景として、池田さんは高度経済成長政策を打ち出し、所得倍増をとなえたわけです。

そこで産業界からは、大学は役に立つ人間を育成すべきだという要請も出て参りました、山本さんが言われたように専門教育を重視しなければならんという方向が出てきたのです。学生の運動の中心的テーマの一つに、産学協同路線反対というのがありました、そのことが非常にシリアスな問題になってきた時代ですね。三十五年代までの学生運動の主流は日本共産党をケルンにしていたが、昭和三十五年以降それが徐々にルーズになっ

て、やがてニュー・レフトが出てくるわけですよ。

河合 ほとんど連日のようにデモがありましたな。学生の目の色にも危機感がみなぎっていて、夜中まで河原町あたりでデモをやる、わたしたち学生課の者は逮捕された学生を警察へもらい下げに行くのが仕事みたいになりました(笑)。そんな時代だったですよ。

しかし、わたし思いますのに、当時の学生活動家は、いまの学生活動家とちがいましたよ。たとえば岡本清一学生部長などと夕暮れ迫る校庭の木の下で大声を張り上げてやり合っている、それでも岡本先生がなにか言い始めると、黙って聞いておりましたわ。

山本 そういうところがありましたね。

河合 そうでしょう。学生運動そのものにしても、なにかロマンがありましたよ。寮闘争もいろいろありましたけれども、われわれは先生方と話しあうんだというか、お互いに心が通いあうものがあつたですよ。

駒井 あの当時から学生は過激なこともやりましたが、わたしなども学生と随分議論をしたり喧嘩もしましたけれども、なにか人間的な結びつきといったものが確かにありまし

た。まだロマンがあったわけですね。当時はニュー・レフト的なものもまだ明確には出てきていない時代でしたが、喧嘩をしておつても警察につかまると、「先生お願いします」と仲間などがすぐに頼みにくる。河合さんが言われたように、警察へ学生をもらい下げに行くのが学生課の仕事みたいな感がありました。

山本 当時学生運動のリーダーをやっていた人たちが、いまは社長や重役や生協の理事長などになっています。お互いに喧嘩しあった間柄にしては、憎しみはないですね。今でもわたしのところへ電話をかけてきたり、「先生その節はお世話になりました」と言つて、奥さんや子供を連れてあいさつに来たりする人がいますよ。旧交を温めに来ます。

しかし、現在の学生活動家はどんなんでしょうか。ああいうヘルメットをかぶり覆面をしてやっている学生でも、何年か時代がたてば、現在の学生部長さんや課長さんのところへ来て、旧交を温めるといふようなことを、はたしてやるものでしょうか。随分いまはドライになっているような感じがするんですね。

駒井 学生たちは若いですからね、わたしらもそうだったけれども、行き過ぎることもあるわけですね。わたしはそういう学生たちによく言ったことは、「論争も喧嘩もする、けれども人間的な結びつきだけは大事にしようではないか」とね……。

山本 それが同志社の特徴だとわたしは思うのです。これはつい最近の事例ですけども、此の間まで学生運動の第一線で頑張っていた相当の猛者が、今度結婚するというので本人と両親がいっしょにわたしのところへ来てましてね、「ぜひ先生に、キリスト教による結婚式を挙げさせて下さい」、こう言うてくるんです。こういうのが同志社の体質でしょうか。

河合 最近のことはあまり知りませんが、そういう点は、どんなにやんちゃをしている学生にも、やはりあったですよ。ひとつには、学生部のスタッフも学生たちも誠実だったからじゃないですか。ただ、われわれが誠実にやっていて、いちばん困つたのは、やはり学費値上げ、これだけは本当に困りましたわ。学生部が学校から感謝されるときは、学生から怒られるときであり、学生からはめら

れるときは学校から「学生部は何をしとるか」と叱られるときでしてね、饅頭が両側から押されてぺしゃんこになるような、そういう役割を果たしておつたでしょう。

山本 それは確かにそうだったな。学生部のスタッフはS・P・Sの理念に立って、学生に対してもものを言うが、学校側に対しても注文をつけた。それがいま言われた学費問題などにみられるように、学校当局の出先機関として、学校の方針なり政策を学生に押しつけていくことが任務のようになっていた。大学紛争の時代になると、学内の秩序維持が唯一の任務であるかのように考えられ、また言われるようになってしまった。

河合 そうです、ですからS・P・Sは非常に無力化して、「今さらS・P・Sでもあるまい」というわけで、ほとんど問題にもされなくなつた。

大学紛争とその後

駒井 昭和四十年代前半のあの大学紛争は、S・P・Sを無力なものにさせた、それは確かですけどもね、大学そのものの権威

という社会的なステイタスも無力になったわけですよ。わたしなどが入社した当時は、大学の権威を一般社会も認めておりまして、たとえば東京大学の総長が入学式で述べたことばを、新聞は大きく載せる、同志社大学学長の卒業式でのことばも大きく載るという具合でね、権威があった。それが大学紛争を契機として崩壊したと言えると思うのです。

山本 同志社でも、たとえば明徳館の前へ教授会のメンバーすべてを並ばせて、一人一人に自己批判をやらせる。ちょうど中国の紅衛兵が文化大革命でやったようにね、一人一人を吊るし上げるようなやり方で……。先生方も心からそう思われたかどうかわかりませんが、みんな自己批判させられて、学生に託びたんですよ。そういうことからすっかり自信喪失の状態になりましたので、大学の権威も完全になくなりました、あの時点においてはね。最近は少し変ってきたように見受けられます。

河合 大学紛争の時点までは、学生部のスタッフとか学生主任の先生方が、何かことがあると学生の矢面に立ってやっておったでしょう。紛争になると、それが全部の先生方の

ところへパツと行ったわけですからね、学生問題というものの認識は全学的に深まったけれども、先生方も苦勞なさったと思いますよ。

しかし、わたし思いますのに、たとえば学寮問題をひとつ見ましても、他の大学では寮母さんまで追い出されて、寮は完全な治外法権になってしまいましたわな、学生の皆ということですね。ところが同志社では、寮母さんはそれぞれの寮の中で、ちゃんと生活ができたのです、これは珍しいケースですよ。占拠された校舎の中に、女子の職員が一人だけいるというような状態でしたから、寮母さんには随分ご苦勞をおかけしましたけれども、学生たちは生活を保証しておったですからね。

駒井 学生部の仕事を始めた当時、学生運動が起こるのは後進国現象だと、わたしは思っておりましたよ。また、事実そうであつた。それがそうでなくなるのは昭和四十二、三年からで、ニュー・レフトの運動が世界的に起こってきた、これが先進国における学生運動で、日本もその中へ入ってきたと言える。ニュー・レフトというのは、ソビエト的な社会主義体制に対して幻滅を感じる、い

わゆる「体制化された社会主義」というものを肯定しないわけで、その思想的背景の一人はマルクレーゼですけれども、彼は初期のマルキシズムを高く評価する。そして人間疎外とか人間意識の革命といった問題を重点的にとりあげて、ソビエト体制を批判したわけですね。そういうマルクレーゼの思想をうけついで新しい抵抗運動を始めたのがニュー・レフト運動であつて、そうした流れが日本へも入ってきたので、それは先進国型学生運動といえます。

山本 世界的なスチューデント・パワーの運動の波が日本へも影響をもたらした、日本もその一環となった、それが先年の大学紛争であつたとわたしは見ているわけです。その運動の理論的な支えのひとつは、駒井先生がいわれるようにマルクレーゼでしょう。

しかし、その運動の波は、日本の大学になにをもたらせたか、その運動によってなにが実ったかと考えますと、わたしは空しい気がするのです、まるで台風が吹き荒れた後のよう。台風がいろんなものを破壊するよう。物理的な破壊はいろいろありました、しかし、それ以外に果たしてなにが残つたでし

ようか。たとえばさまざまな大学改革案が、紛争中には雨後の筍のように出されました。けれどもあの改革案はその後どうなったのでしょうか。全国のどの大学でも、紛争が下火になるに従って、学校側もだんだん問題になくなる、学生もなにも言わないという状況になって、大学はだんだん紛争以前の状態に戻りつつあるんじゃないでしょうか。

河合 おっしゃる意味はよくわかりますが、先生方もなにしろ初めての経験でしたから、随分苦労されたと思いますよ、われわれ学生部の者は慣れていましたけれども。だからあの強烈な体験はそれぞれふまえておられると思いますけれどもね。たとえばカリキュラムなどかなり改革されたんじゃないですか、必修科目を減らして選択科目をふやすとか、大教室に詰め込んで講義をするのをやめて、なるべく小教室、小クラスにしようとか。

山本 うん、そういうことはありましたね。

河合 地味だけれども、そういう改革は進められました。ゼミを低学年からやるとか。山本 確かにそれはありますね。それから

学生運動に関していえば、他の大学の様子を見ると年とともに運動形態が変りつつあるにもかかわらず、同志社では依然として紛争当時のままの形態が残っているでしょう。これなどもう時代遅れの感じがします。世界の波からとり残されておるのではないか。その点、学生諸君ももう少し創造的な賢明な学生運動の在り方を考えなくちゃならん、そういう時期にきていると思うんですよ。

ただ、以前と違ってきていることは、たとえば学長や学部長が明徳館前で学生たちと話し合いをやっている、以前なら大勢の学生が集まってきて、何時間でもやりとりを聞いておりましたが、いまは本当に少数の活動家だけでね。一般学生は全然無関心です。活動家は孤立している。だから学校としてはそういう現実を頭において、新しい教育方針を打ち出したいのだと思うのです。

S・P・Sの再認識

河合 確かにおっしゃるような状況はあるわけで、紛争時代に空中分解のようになってしまったS・P・Sを、また見直そうではな

いかという動きが、他の大学ではぼつぼつ出かかっているのです。大きなトラブルもない大学ではね、「いまがいちばん勉強のチャンスだ、この辺でもう一度S・P・Sを考えなおしてみようではないか」と、そういう気運が出つつあるんですよ。

山本 そうそう、わたしはびっくりしたんだけど、私立大学連盟などでもそうらしいですね、S・P・Sにかえろうじゃないかという運動が起こりつつある。わたしもそれで講演を頼まれたりしましてね。

河合 そういうゆとりができたんですよ、他の大学ではね。学生部は文字どおり学生助育の立場に立って、きめの細かいオリエンテーションをやるとか、フレッシュマン・キャンプをやるとか、いろいろ始めておりますよ。

駒井 わたしたちが学生部で相談をして、グループリーダー・キャンプをやるんじゃないかというので、唐崎ハウスでやりましたが、学生の方はサークルや自治会のリーダーが出席する、大学側からは学長や部長さん方にも出席していただいてやりましたけれども、ああいうキャンプが出来るといいですね。

大学紛争で壊れてしまったけれども。それから、学費が高くなると進学させることが家庭の大きな負担になってきますから、奨学金やいいアルバイトを用意して学生の就学を守ってやるとかね。カウンセリングにしても、ノーローゼ的な学生が大学の大衆化とともにふえるから、しっかりした体制でもってやっていかなければならぬでしょう。

またわたしたちの時代につくった学生健康保険組合は、当時は先進的なものでした。学生の疾病は、当時はルンゲが非常に多かったわけですが、いままの時代にも疾病や怪我はあるわけですからね。

河合 そういった活動がすっかり影をひそめて、学生部のスタッフというのは学生運動に対する対策的な仕事ばかりやるようになってきた、「S・P・Sを言う」というような時代じゃない」というわけで、無力感にさいなまれていたわけですよ。また、勉強する余裕もなかった、これは事実だと思いますね。

ところが最近になって、山本先生もいわれるように、私大連盟あたりでも学生部の在り方とか学生助育の在り方を研究してみようじゃないかというわけだね、精神的にもゆとり

が出てきたんじゃないですか。同志社大学でも昨年あたりから、学生課ではフレッシュマン・キャンプを始められたように聞いていますが、これは非常にいいことだと思いますよ。

山本 わたしも聞きました。安中へ行くとか、函館へ行くとか……。いいことですね。

河合 この辺で原点にたちかえって、本当の学生助育を考え、その方策を見出そうじゃないかという気運が出てきたことは、大学のためにも学生のためにも幸いだと思うのです。

駒井 紛争が激化しているときには、どうしても対症療法に終りやすいから、その反省期を経て、いま脱皮しつつあるわけです。

S・P・Sと言いましても、昭和三十年代と現在では当然ちがうでしょうし、その形態もいろいろあるわけですが、復活すべきものは復活し、新しくとり入れるべきものはとり入れて、時代に即応したS・P・Sをやるといいですね。とくに同志社のような大衆化された大学では、学生と学生の結びつき、学生と教職員の結びつきが稀薄になりがちですから、フレッシュマン・キャンプなど非常にいいと思いますな。

河合 お金もかかりましようが、やる意義があることですよ。

山本 わたしは私大連盟で話したのですが、教室での知的な教育に併行して、学生部はゼミクラブ活動に対するサービスを重点に置いた仕事をしてほしい。そしてそのサービスも、ただ経験と勘だけでなしに、ケース・ワークとかグループ・ダイナミックスとか、そういった領域のことを大いに勉強して、より効果的な援助を心がけていただきたい。学生たちはクラブ活動すなわち学生自身が自主的に行う文化活動なりスポーツ活動から、実に大きなものを体得するわけですからね。

女子学生について

駒井 わたしはいま、女子学生だけの大学にいますので、最近の男子学生のこととはよくわかりませんが、大衆化された大学の学生は大体四つに類型化できるんじゃないかと考えておるのです。一つは学習型で、授業にもよく出席して一生懸命勉強する、そしていい会社へ就職するとか学者になるとか、そういうふうに考えて大学生を送る。第二はイデオ

ロギー型で、ニュー・レフトとか学生運動とかに走るタイプで、何か新しい思想につよい関心を示すとか、宗教的になるとか、そういうものに価値を見出そうとするタイプです。

第三はサークル型、これは文化団体とかスポーツ団体とか、そういう活動に大学生活の中心を置こうとするタイプです。それから第四はデカダンのニヒリズム型で、これがいちばん困るわけですが、ニヒリズムならニヒリズムでそれは一つのイズムだからいいんだけれども、デカダンので大学も人生もどうでもいい、ただ目の前の享楽だけに没頭するというタイプですね。大きく分けるとその四つの型があると思うのです。だから学生部としては、そういう学生層というものを念頭において仕事をやっていくことが重要じゃないでしょうか。現在までのところイデオロギー型のうちニュー・レフト型の学生だけを重視して仕事をしてきたわけですが、他のタイプの学生を忘れていたのでは、学生部に課せられている任務を充分には果たしていないことになりはしないか。以上のようなタイプは女子学生にもあるわけでして、われわれは大衆化された大学のなかのさまざまなタイプの学生

全般に目を配って、それぞれのタイプに応じたS・P・Sというものを、意欲的に開拓していく必要があるわけです。

山本 わたしも女子大学にいますのですが、女子大にも学生会という組織があるにはあるのですが、昨今その活動は大変低調ですね、委員に選ばれた者だけが何かやっている、一般学生は全く無関心。こんなことであった方がいいかと思っているわけですよ。

駒井 その点はわたしの方もおなじようなことでしてね、自治会はあるにはあるんだけれども、活動らしい活動はほとんどなにもやりません。ましてや学生運動はないわけですから、さっき言ったことにちよつとつけ加えますと、女子学生にはサークル活動タイプと、デカダンのニヒリズム型があります。学習型も多少ある。ないのはイデオロギー型ですね、これは潜在的にはあるかも知れませんが、ほとんど見受けませんな。

山本 話がすこし外れますが、女子学生の就職のことですけれども、女子大でも就職に対する関心が急速に高まってきました。時代の反映もあるかと思いますが、就職希望者がふえましたね。父兄会の総会を毎年二回開き

ますが、以前はそこで出る質問というのは、奨学金とか修学上のことが主でした。ところが昨今は就職についての質問が多いのです。学生だけじゃないに、ご父兄にも就職に関する関心が高まってきたように見受けられるのです。ところが、四年制の女子大学というのは、どうも企業側には不人気のようですが、河合さんどんなものでしょうか。

河合 そうはいいますが、同志社などまだ恵まれている方ですよ。単科の四年制の女子大ですと、求人は二〇〇社かせいぜい二五〇社程度。ところが同志社女子大学だと四五〇社から四六〇社ぐらい来ているでしょう、同志社大学の女子学生については一三〇〇社です。ですからより好みさえしなければどこかへ就職できるのです。

そういう状況なんです、女子学生の職業意識といいますが、卒業後のプランといいますが、そういったものが確かに変わってきました。大学で申しますと、毎年四月に七〇〇人から八〇〇人の女子学生が就職登録をするわけですが、そのうちの五十四〜五十五%ぐらいしか就職はしなかったのです。「どこかええ所があったら行ってみようかなア」という

程度でした。就職しなくてもいいわけだし、ご父兄も就職を望んでおられなかったわけですよ。ところが昨今はだんだん就職する学生がふえましてね、去年など八十六%の女子学生が就職しました。以前ならお嫁さんに行く前に肩書きをつけるぐらいのつもりで大学へ入ってききましたが、今はそうではなくなってきました。これはまづ、一種のブームのようなものかもしれませんがね。彼女たちの中には就職に際しても、大企業ならよいというのではなくて、こういう仕事をしたいという仕事中心の考え方で就職口を選ぶ人が少しずつふえてきているのも事実です。ですから縁故などで大きな会社を紹介されてもそれを辞退して、中堅クラスの会社の営業店へ入るとか、そういう女子学生がだんだん出てくるようになってきました。

山本 高望みさえしなければ、就職口は女子学生にもあるということですね。しかし、日本の実情としては、就職状況がいい大学がよい大学という認識が、ご父兄などにまだまだあるわけですね、それといま言われた結婚の肩書きということもあるでしょうね。同志社女子大学などは一応名門校といえはいえ

ますので、そういう女子大学へ行かせたらよい就職口があるだろうと、そういう期待を抱かれるご父兄がまだまだおられるわけですよ。ですから、いまのお話ですと、そういうご父兄や学生に、認識を改めていただく必要があるわけですね。

河合 そうです。それと男子とちがいまして、結婚までの腰掛け程度のつもりで就職する女子学生が、以前は多かったですからね、「折角英語を習ったのに全然つかう機会がない仕事につかされた」とか、「小間使いばかりさせられる」というので、簡単に退職したわけです。だから企業側も、四年制の大学卒よりも短大の方がいいという考えだったのです。

そのことについては、雇用者側とわたしたちもよく話しあうのですが、四年制の大学を卒業された女子社員を、企業側がうまく使いたくはないという問題もあったわけですね。やる気は十分もっている女子卒業生がたくさんいるんですから、そういう人に合った仕事をやらせたら、能力を発揮して意欲的にやるのです。企業側でもだんだんそのことを考えて下さるようになりましたね、銀行ではいま、四年制の大学を出た女子行員の平均就業

年数が四年になった銀行もありますし、商社でも三年に近づきつつあります。

就職問題について

山本 学生本人も企業もそうだけれども、ご父兄も認識を改めていただかなければなりませんね。

河合 そうなんです。そしてそれはなにも、女子学生だけじゃありません、男子の場合もそうなんです。就職のガイダンスなんていうのは、むしろご父兄を対象にやった方がいいわけですね、関西学院など年に二回おやりになる。あの大学は八割が阪神出身の学生であるということもありますが、二千人ぐらいの卒業予定の学生の父兄が、二回で千五百人こられるそうですよ。関西学院はそこで両親に、「息子さんはもう一人前なんだから、あれこれ注文をつけないでご本人にまかせなさい」といってくさびを打ち込むわけですね、これが成功しているようです。

同志社でも父兄会をお持ちの学部では、懇談会があるとき就職委員の先生が出掛けられて、できるだけ子離れをしていただくように

各地で説明をしておられます。法学部の場合には、毎年名古屋でやられるときわたしに来てほしいと言われるものですから、わたしは行ってその話をいたしますけれども、親とくに母親が子離れしてない、そのことが案外学生を苦しめているんですよ。ちょっと意外な感じをうけるほど、いまの学生さんは非常に親孝行、親思いですよ。親は何もいわないのに、親の気持ちを察して「地元へ戻って就職してほしいと望んでいると思います」というわけです。とにかく、子離れしない、乳離れしない、これが就職問題をむずかしくしているのです。けれども、同志社大学に限って申しますと、Uターンは年々減っています。

七、八年前までUターン志望が四十%くらいありましたが、いまは約二十%ですからね。そして女子を除きますと、大阪本社よりも東京に本社のある会社に就職する者が年々増加してきました。大阪と東京の差がだんだんなくなってきたのです。ですから案外地元志向だけではないわけです。女子ですと東京に本社がありまして、大阪支社で採用されたら、大阪から動くことはありません。男子はそうではない、本社採用になったら、どこへ

行かされるか、海外へ行かされるかもわからない、「それでもいいから採用して下さい」と、勤務地の注文をつけない学生がふえてきました、これは本物です。いろいろ言われまされた、これも同志社の学生はそういう点、非常に心強い一面をもっておりますよ。

現代の学生と今後の同志社教育

駒井 いまの学生は、就職の話をきいても思いますが、非常にプラグマティックになっていますね。わたしたちの学生時代には読む本といえば哲学書でね、西田幾太郎の『善の研究』とか和辻、阿部、田辺、三木さんの本だとか。いまはそうじゃないでしょう。

山本 ハウ・ツウものとかダイジェスト、そして漫画ですね。感覚的にパッとわかるもの。哲学書のような難しいものはあまり読まんでしょ。

河合 就職の面接する人がよく言われますが、四、五分話しているとわかるそうですよ、つけ焼き刃的な知識か本物かがね。本物は少ないわけです。けれども最近キャンパスを見ていますと、学生の姿が多いですねえ、

よく授業に出席しているんじゃないですか。以前は試験シーズンになると急に賑やかになったものです。

駒井 それもやはり実利型でしょう、就職を有利にしようとか、そういった目的でね。

河合 それもあるでしょうが、よく勉強をするようになったことは確かだと思いますね。ただ、教室で習ったことをどこまで自分なりに考えて、問題を掘り下げてみるということをやっているか、そこところはわかりません。

わたし思いますのに、四年間同志社で学んで、「おれはこういうものを身につけた」と胸を張っていえるようになってくれたら成功ですね、教室での勉強に限らず、なにかひとつでもね。それと、わたしが驚きますことは、就職先で卒業生に会いますと、「同志社で学んでよかった、いい大学だった」と多くの人がいうことです。同志社が第一志望ではなかった学生、卒業生がたくさんいるはずなんです、みな、よかったと申しますね。同志社の教育のよさは、案外そとへ出てみて初めてわかる、というようなものではないでしょうか。

山本 同志社教育といってもいろいろな面

があるでしょうが、その一つはキリスト教主義ということですね。戦前のチャペルは入口で名刺を入れて出て出席をとるようにしていた、それでもその名刺を友人に頼んで入れてもらったり、窓から逃げだす者もいました。そういう先輩達でも讚美歌や聖書の言葉をおぼえていたわけです。そして自分の息子や娘が同志社へ入学すると、「うちの子供は礼拝にはちゃんと出席しようか」と、尋ねたりしますね。そういう点、先輩達には同志社の特徴のようなものを身につけて卒業していつていくわけでしょうかねえ。

河合 そうじゃないですか。ノンクリスチヤンの卒業生でも、「山本先生、チャペルで結婚式を挙げたいんですが、お願いします」と、よくいつてくるでしょう。今はチャペルも結婚式には使えませんが、今も結構あります。

山本 そういう人が多くなってきました。現実はどうかいと、女子大など「聖書」は必修科目で、毎日礼拝がありますが、出席する者は少ない。これは実にさびしい。教会の礼拝出席者も少なくなってきましたね。

河合 それでもわたしは、同志社にはやはりキリスト教的な雰囲気といいますかね、そ

ういったものがあると思う。わたしの体験でもあの入学式の雰囲気ですね、あの場所で祈禱があるでしょう、あれを聞いたとき、ほんとに身がひきしまるような感動を覚えたものですよ、いまの学生諸君もそうとちがいますか。

駒井 それはあるでしょうな。とにかく、同志社はキリスト教主義、自由主義そういった伝統を大事にして、これを失わないようにやってほしいですね。それから国際主義ですね。

山本 キリスト教は諸外国の大学の例をみましても、だんだん影が薄くなりつつあるんですね、だからといって同志社がこのままであつてよいとは思いませんが。今後大いに考えてみなくちゃならない問題です。

駒井 日本は経済的には非常に強くなって国際的に進出している。工業技術の面でもそう、ハーバード大学のエズラ・ボーゲル教授の著書によると、「今や欧米は日本に学ぶべきだ」というふうなことが書いてある。ところが他の面ではどうかというと、これはライシャワー氏の本に書いてあることですが、「日本は経済大国になったけれども、日本人の中に国際学会とか国際会議などでチェアマ

ンをやれる人は、指折り数えるほどしかない」とね。国連の中でもそうでしょう、日本は世界で三番目に多く拠金をしている、しかし日本の国連スタッフの数は非常に少ない。日本人には国際性がない、英語など外国語の力もまだまだ弱いのです。

わたしは上野総長にも申し上げたんですが、同志社こそ国際性をもった人材をどんどん育てるべきだと思うのです、国際主義の伝統が明治以来あるわけですからね。同志社の精神をもって、国際的に活動ができる人物を養成することですね、これをやってほしい。田辺に国際高校をつくりましたが、あれは非常にいいことで、将来は帰国子弟のみでなく、外国人の子弟で、日本で初等中等教育を受けたいという人も出てくるでしょうから、そういう外国人の子弟も受け入れて教育をやっていくような、国際性豊かな学校にしたいだかと思ひます。それと、いま言われたキリスト教主義にもとづく良心教育ですね、この両者がかみあつた教育を期待したいと思ひます。

（一九八一年二月一九日収録 於・有終館担当理事室）